初段コース

5000人目の入段者

最近は外国にも将棋が伝わって多くの入段者が出ている。A・ランドルフ氏もその一人で、ちょうど初段コース5000人目の卒業生に大高信三郎氏があたったので両氏のお好み対局をお願いした。

544.9
将棋世界

世界一強い外人さん

八段　山田道美

五千人目の記念対局

この将棋は、初段コースの入段者五千人目の記念対局である。

五千人目の好運にあたった人は、大高信三郎氏。

大高さんは、中央魚類KKにお勤めで、三十二才。得意な戦法は中飛車で、はじめは矢倉が好きだったが、振飛車党に転向したという。会社は中央市場で魚類をせりにかけて卸す仕事とか。威勢のよさそうなお仕事に反して、大高さんは温厚で無口なので、予備知識はこれぐらいしか聞き出せなかった。

ランドルフ氏

一方、相手にえらばれた、ランドルフ・アレックスさんは、アメリカ・アリゾナ州出身で、四十八才。発明家。新しいゲーム（頭脳スポーツ）の発明のために、世界各国をまわっているという。日本に来て三年になり、大変な親日家で、生活様式はすべて日本式。夫人（アメリカ人）も将棋を指し、二枚落では勝てないという。

ランドルフさんの棋力は初段ぐらいで、目下、田丸三段に週二回教わっている。

先▲初段　大高信三郎
△初段　ランドルフ・A

▲7六歩　△8四歩　▲6八銀　△8五歩
▲7七角　△3四歩　▲6六歩　△6二銀
▲6七銀　△5四歩　▲5六歩　△5二金右
▲5八飛　△4二玉　▲4八玉　△3二玉

▲3八玉　（第一図）

流行の中飛車

表題に「世界一強い」と書いた。どこからか文句が出そうである。実をいうと、私はこの将棋を見たとき、外国人で強いのは英国のレゲットさん（四段）という知識ぐらいしかなかった。レゲットさんの将棋なら、前に一度見たことがあるし、万一、レゲットさんから苦情が出ても、いまはロンドン在住だから、海のかなたなら大したことはない。

そんな風に考えて、「世界一強い」と書いたわけだが——ところがである。渋谷の高柳道場に恐しく強い外人がいるという噂が耳にはいった。なんでも、エディさんというトルコ人で、町の道場の三四段は楽に指せるらしい。もし、エディさんから「だれか忘れてやしませんか」と、クレームが出たら、お二人で、盤上で雌雄を決して下さい。

大高さん

（第一図は▲3八玉まで）

▲大高　持駒　なし

	9	8	7	6	5	4	3	2	1
一	香	桂				金	銀	桂	香
二		飛		銀	金		玉	角	歩
三	歩		歩	歩		歩		歩	
四					歩		歩		
五		歩							
六	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
七				銀			玉		
八		桂		金	飛	金	銀	桂	香
九	香								

△▽持駒　なし

きちんと正座して

お二人とも、きちんと正座して盤に対している。大高さんはコチコチに固くなっているが、ランドルフさんの方は、いかにも異国のゲームを楽しんでいる風だった。

大高さんは、いち早く▲2八玉から▲3八銀と、玉を美濃の堅陣におさめ、中飛車の第一段階の駒組を完了した。

一方、ランドルフさんは、この間に両方の端歩をつき合ってから、△5三銀と出、先手▲3八銀のとき、敢然と△7五歩と仕掛けた。プロ顔負けのあざやかな駒さばきだが、

さて、局面。大高さんの作戦は中飛車だ。私達プロでもその対策に悩まされている。この流行の戦法に、ランドルフさんはどう対処するか。

（第一図からの指手）

△7四歩　▲2八玉　△1四歩　▲1六歩
△9四歩　▲9六歩　△5三銀　▲3八銀
△7五歩　（第二図）

指しすぎの懸念がなきにしもあらずだ。

▲大高　持駒　なし

（第二図は△7五歩まで）

△5　持駒　なし

（第二図からの指手）

▲7八金　△7二飛　▲7五歩　△同　飛

▲7六歩　△7四飛　▲4六歩　△6四歩

▲5九飛　△7三桂　（第三図）

どこかで見たような

後手の超急戦に、大高さんはちょっと戸惑った様子だったが、すぐに気を取り直して、▲7八金と手堅く受けた。この▲7八金で、7五同歩と取るとどうなるか。

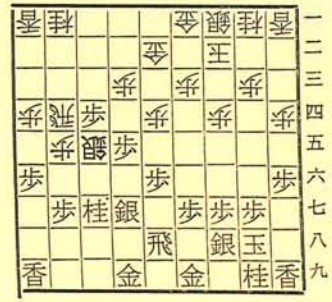
▲7八金で7五同歩の変化

7五歩　6四銀　7四歩　8四飛　6五歩

7七角成　同　桂　7五銀　（イ図）

▲先手　持駒　角歩

（イ図は△7五銀まで）



△後手　持駒　角

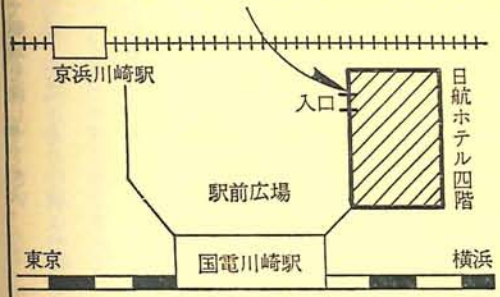
イ図で、先手がいいようだが、むずかしいわかれである。

イ図で、7三歩成なら、同桂、4八角、7四飛、7五角、同飛、7六歩、6五桂（好手）7五歩、7七桂成で、後手有利。

また、イ図で、5五歩なら、同歩、5三歩5一金引、5五飛、3三角で、後手が指せると思う。

イ図までの手順で、7四歩で7六銀、また

日航ホテル（4階）将棋クラブ　（日本将棋連盟支部）



▲AM11：30～PM10：00（年中無休）
▲席料1日200円（時間制限なし）
▲冷暖房完備，閑静。
▲指導日（月曜，金曜）中村熊治六段
▲各月第1月曜日　松下八段指導
▲お問合せは……044（24）5941
川崎市日進町1—1
川崎日航ホテル4階

は6五歩で7八飛という、まだむずかしい変化があるが、こうした激しい変化は、一般に中飛車をやる人は苦手のようだ。

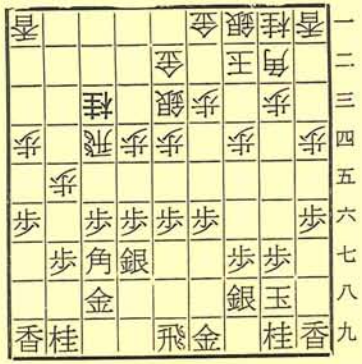
おだやかな▲7八金に、ランドルフさんは△7二飛から、素早く一歩を手に△7四飛と中段に浮く。好手順である。

田丸三段がこの将棋の記録係をつとめている。どうやら、この急戦策は、田丸君の入れ智恵らしい。

△7三桂。ここで、私ははじめて、ハテ、どこかで見たような形だな、と気ずく。

▲大高　持駒　なし

（第三図は△7三桂まで）



△5　持駒　歩

（第三図からの指手）

▲4七銀　△8六歩　▲同　歩　△8四飛

▲3八金　△6五歩　▲同　歩　△7七角成

▲同　桂　△8六飛　▲8七歩　△8二飛

（第四図）

プリーズ、イーズイ

第三図で、大高さんは敵の意図がさっぱり分らないらしく、じっと盤面をみている。

それもそのはず、第三図の後手の構えは、富沢幹雄七段が考え出した、ツノ銀中飛車破りの攻撃形なのである。富沢—田丸—ランドルフという経由で、この秘伝がつたわったらしい。

△8六歩、▲同歩。いよいよ富沢流の攻めだ。お二人とも、まだ正座で両手をきちんと膝の上にそろえている。私は、対局者に「どうぞお楽に」と小声でいったが、ランドルフさんには通じないらしい。田丸君に通訳を頼むと、彼は自分の膝をたたいて、「プリーズ イーズィ」と言った。

とっさに田丸君も省略した言い方をしたわけだが、あとで（対局後に）、正確にいうと〝please be at ease〟デス、とランドルフさんに教えられていた。ランドルフさんは田丸君の英語の先生なのである。

ランドルフさんは膝をくずして、あぐらになってから、△8四飛と寄った。しかし、これは指手の方も「プリーズ、イーズィ」になった緩手。△8四飛では、8五歩（このツギ歩が富沢氏自慢の手）、同歩、同桂、8八角6五歩、同歩、8八角成、同金、6六歩、同銀、7六飛（ロ図）で、後手優勢だった。

大高さんは、プロの七段の先生の秘伝の攻

▲先手　持駒　角歩四

（ロ図は△7六飛まで）

△後手　持駒　角歩

めをやられては抵抗のしようがない。あなたまかせとばかり、▲3八金と堅めて待つ。

ランドルフさんは少考して、△6五歩と角交換をはかった。しかし、これは疑問。△6五歩では、8五歩、同歩、同桂、8六角、6五歩、5五歩、同角と、攻めるところ。

大高さんは△6五同歩と取って、ようやく愁眉をひらいたようだ。こうなれば、ツノ銀中飛車の思うツボだ。

▲大高　持駒　角歩

（第四図は△8二飛まで）

	9	8	7	6	5	4	3	2	1
一	香					金	銀	桂	香
二		飛			金		玉		
三			桂		銀	歩		歩	
四	歩			歩		歩			歩
五			歩		歩		歩		
六		歩	桂	銀		銀	歩	歩	歩
七			金		飛		金	玉	
八								桂	
九	香							香	

△7　持駒　角歩二

（第四図からの指手）

▲6六角　△4四角　▲7五歩　△6六角

▲同　銀　△8四飛　▲6七角　△8六歩

▲同　歩　△同　飛　▲5七銀　△8七歩

▲8九歩　△7六歩　（第五図）

ランドルフさん快調

第四図で、大高さんは▲6六角と、巨砲をすえた。急所の角打ちである。

△4四角と受けたとき、大高さんは▲7五歩と誤った。▲7五歩では、4四同角、同歩5五歩、同歩、5四歩で、7一角打をねらっておもしろかった。手順中、4四同歩のところ、同銀なら、4五歩で、先手がいい。

先手の疑問手に、ランドルフさんはあやうくピンチを逃れ、△6六角と角交換してから△8四飛と桂頭を守る。これで、先手は逆に桂頭のキズを心配する羽目になった。

やむを得ず▲6七角と、キズを防いだとき、ランドルフさんは、△8六歩と快調だ。

（第五図からの指手）

▲7四歩　△2二角　▲5五歩　△同　角

▲6八銀　△7七歩成▲同　金　△6五桂

（第六図）

▲大高　持駒　角銀歩

（第五図は△7六歩まで）

	9	8	7	6	5	4	3	2	1
一	香					金	銀	桂	香
二					金		玉		
三			桂		銀	歩		歩	
四	歩			歩		歩			歩
五			歩		歩		歩		
六		歩	歩	歩		銀	歩	歩	歩
七			桂		飛		金	玉	
八			金					桂	
九	香							香	

△7　持駒　角

チェスの感覚か

第五図で、先手はまったく非勢におちいった。それでも捨て身に、△7四歩と突く。

▲2二角に、大高さんは一本△5五歩と突き捨ててから、▲6八銀と受ける。ようやく振飛車党らしい持味が出てきたようだ。

ここで、ランドルフさんは強手を放った。△7七歩成から△6五桂ととんだのである。このように大きな駒を捨てて、思いきった手が指せるのは、チェスの感覚かも知れない。

▲大高　持駒　歩二

（第六図は△6五桂まで）

	9	8	7	6	5	4	3	2	1
一	香					金	銀	桂	香
二							玉		
三					銀	歩		歩	
四	歩		歩		歩		歩		歩
五				桂	角				
六		歩		角	飛	銀	歩	歩	歩
七		飛	金	銀		金	金	玉	
八		歩						桂	
九	香							香	

△7　持駒　桂歩二

（第六図からの指手）

▲8六金　△7七桂成▲5五飛　△6八成桂

▲8五飛　△6七成桂▲8二飛成△7二歩

▲同　竜　△6二金　▲7一竜　△5七成桂

▲3六銀　△5五桂　（第七図）

中飛車、待望の反撃

△7七桂成のとき、大高さん▲5五飛と切る。中飛車、待望の反撃である。

しかし、ランドルフさんはあわてなかった飛車を取らずに、△6八成桂と銀を取る。好手である。これを先に6七成桂と角を取ると8五飛、6八成桂で、成桂の位置が違う。そして、この成桂の位置の違いは、そのまま勝敗を左右するほど大きいのだ。

先手▲8二飛成では、8一飛成の方が正しい。

ここでランドルフさんはしきりに8二竜のあたりを気にしていたが、△7二歩と打ち、▲同竜と取らせて、△6二金と寄った。この辺の手順はちょっと不可解だ。△7二歩では単に5七成桂でいい。

▲大高　持駒　飛角歩三

（第七図は△5五桂まで）

	9	8	7	6	5	4	3	2	1
一	香		竜			金	銀	桂	香
二				金			玉		
三					銀	歩		歩	
四	歩		歩		歩		歩		歩
五					桂				
六		歩				歩	銀	歩	歩
七		金					金	玉	
八								桂	
九	香							香	

△7　持駒　角銀歩

（第七図からの指手）

▲8一飛　△5二銀　▲7三歩成△4八成桂

▲同　金　△9三角　▲7五歩　△7一角

▲6二と　△同　角　▲9一飛成△6八飛

▲5八歩　△4二銀引▲2六香　△7一歩

▲4五銀　△2二銀　▲3四銀　△3一金

▲4五角　△6九飛成（第八図）

ついに逆転

大高さんは▲8一飛と打って、二枚飛車の攻めに出た。しかし、後手の駒台には、歩が一つある。この歩を6一歩と打たれたら、先手は万事きゅうすだ。

ところが、ランドルフさんはなにを心配したのか、△5二銀と銀を手放して受けた。これでついに、形勢は逆転してしまった。5二銀では、6一歩と底歩を打ち、7三歩成のとき、4七銀と攻めて、後手の手勝ちだった。

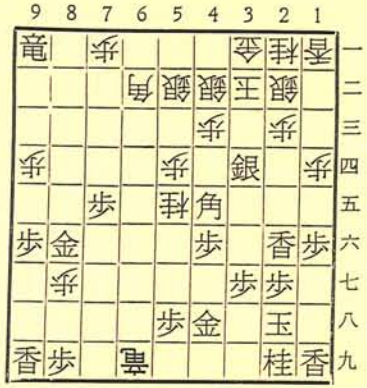
△4八成桂から、△9三角もちょっと不可解だ。まだ、6一金とねばるところ。この辺ランドルフさんは時間をとられて、だいぶ乱れている。

大高さんの▲6二とは、悪手。7一同飛成でいい。思わぬ好転に気がゆるんだものか。

後手は指切りになった。しかし、ランドルフさんは、△7一歩—△2二銀—△3一金とモーレツなねばりに出た。

▲大高　持駒　金桂歩二

（第八図は△6九飛成まで）



△5　持駒　歩

（第八図からの指手）

▲2三銀成△4一玉　▲2二成銀△同　金

▲同香成　△3九銀　▲1八玉　△4八銀成

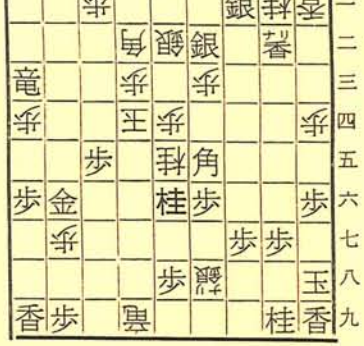
▲3二金　△5一玉　▲4二金　△同　玉

▲3一銀　△5三玉　▲9三竜　△6三歩

▲4二銀打△6四玉　▲5六桂　（最終図）

▲大高　持駒　金歩三

（最終図は▲5六桂まで）



△5　持駒　金歩

まで、百二十五手にて、大高氏の勝ち。

ランドルフさん惜敗す

第八図で、7四桂、5三角、6二歩と、竜の働きを作ってから、2三銀成をねらって、先手の勝ちだ。

それを、大高さんはあせって、▲2三銀成から、▲2二成銀と攻めてしまった。

これで、後手に銀がはいった。さあ、大変だ。ランドルフさんは△3九銀と打って、金を取る。次に、2八金、同玉、3八成桂、同玉、5八竜以下の詰めろをみている。またもや、形勢は逆転した。

先手はもう詰ますよりない。大高さんは△3二金打ち以下、猛然と迫る。

▲3一銀と打たれたとき、ランドルフさんはしばらくどっちへ逃げようかと迷っていたが、△5三玉の方を選んだ。これが、トン死筋だった。

5一玉と逃げておけば、詰みがなく、後手の勝ちだったのである。

ゆび運がなかったというよりない。

古棋書復刻委員会よりお願い

住所変更通知には、旧住所・新住所・会員番号・をお知らせ下さい。

次の方・郵便物が配達されずにもどって来ます。至急転居先、又は片書、をお知らせ下さい。

◎西村　孝様　横浜市戸塚区原宿町四六五
◎高井貞夫様　岐阜市則武新道一八四〇ノ八
◎寺沢吉郎様　土浦市小桜町三一八三ノ二
◎高橋文雄様　新宿区戸塚町三ノ三〇九

新聞棋戦の動き

第十期王位戦

<社三>

名人、まず勝つ

名人の振飛車に対する位取りの西村と、おおいに嘱望されている新鋭五段の王位戦。

第一戦は七月二十八、九の両日東京の羽沢ガーデンで対局されたが、名人の二枚腰がものをいい、先勝を挙げた。

終盤、西村五段必勝の局面だったのを、百三十七手目▲9二角成が失着。ここ▲8三銀成と平凡に指せば、そのあと容易に西村の勝ちだったろう。西村五段は大山名人に対して、終盤で誤ることが多いと聞く。惜しいことだ。

第二局は八月六、七日に神奈川県の陣屋旅館で。

六分間の対局

大山名人が日本テレビのイレブンPMで公開対局した。ことの仔細はコロンビアトップ氏がテレビ局から何でも望みをかなえてやるといわれ、「軍隊を組織してどこかの国に宣戦布告したい。でなければ大山名人と縁台将棋を指したい」という希望。戦争は憲法違反なので、やむをえず名人が縁台にすわり、板盤とお粗末な駒でトップ氏と平手の対戦。

助言やら「どうだ名人参ったか」の雑音のなかで名人得意の中飛車を用い、十六手でトップ氏の王を詰めた。所要時間6分。

司会者に「名人、あなたの望みはなんですか」と問われ「天皇陛下と一局指したい」

果して望みがかなうだろうか。

大山　康晴王位	○	
西村　一義五段	●	

チェス世界戦

将棋連盟の対局は、原則として八月は夏休みである。この夏休みを利用して、地方へ指導対局にでかける棋士も多い。

宮坂七段の場合は本業を休業しチェスの武者修行にシンガポールへ出発した。

八月三日より、チェス世界選手権の第10ゾーン予選がシンガポールで開催され、十ヵ国十六選手が集ることになっている。日本代表としてチャンピオン宮坂七段がその一人として参加するのだ。日本チェス協会からの初参加。

朝日新聞観戦記者の紅氏こと東公平氏も、シンガポール選手権戦に出場のため宮坂七段とともに日航機で飛んだ。

通天閣で王将祭

坂田三吉名人王将の二十三回の命日が七月二十三日。ゆかりの大阪通天閣で法要が行なわれた。

祭壇には高さ一メートルの王将駒が置かれ、将棋連盟関西本部の棋士など集まって冥福を祈った。

そのあと、万国将棋大会が開かれ、七ヵ国の外人十七名も参加。

書評「将棋名言集」天狗太郎著

本格的な文庫本で将棋の本が出版されたのは、戦前の博文館文庫以来である。

名言集。著者として天狗氏は最適のひとである。名言の解説のみでなく、将棋に関する佳話、故事、手筋など内容が豊富であることは喜ばしい。ただ、江戸、明治の話が多く、現存の棋士の名言は五十二項目のうち二つだけという点に淋しさがあった。

その二つとは、新手一生（升田九段）、守りの駒は美しい（大山名人）である。

戦後に木村、升田、大山をはじめ名棋士たちが吐いた名言、そして逸話奇行は数多くありそうなものだが考えてみるとひとつの物語りを象徴する「名言」はあまりないのである。これは（みずからに刃を向けることにもなるが）将棋ジャーナリズムの力不足か怠慢であったかもしれない。

現代の棋士の物語りをのちに伝える必要性を痛感させられる。その意味で天狗氏が本誌に連載中の勝負師の記録は貴重な資料と思われる。

（社会思想社刊、二〇〇円）